

転換期における保育の現状と課題—インタビュー調査から Present issues of Early Childhood Education and Care at the Transition Period—from an Interview Survey

竹石 聖子, 井上 知香, 加藤 寿子

TAKEISHI Shoko, INOUE Chika, KATOUSHIKO Toshiko

キーワード：保育実践、保育者の語り、専門性

Keywords: Early Childhood Education and Care, Preschool teachers' narratives, Speciality

はじめに—問題の所在

近年、様々な方面から乳幼児教育が注目されている。「保育園落ちた日本死ね!!」という主婦からの訴えは表現の方法に賛否はあったものの、待機児童の問題がいかに深刻かを日本中に知らしめた。また、欧米で実施された幼児期の教育の効果についての縦断的な調査結果によれば、幼児期に質の高い教育をうけた子どもと、そうでない子どもの将来を比較すると、前者では後者に比べて貧困、離婚、犯罪などのリスクが少ないという結果が出ている（ジェームズ・J・ヘックマン、2015 など）。

待機児童をなんとかしなければならぬ社会的要請がある一方で幼児期の教育に手をかけることが将来の子どもにとっても幸せであり、社会的なリスクも減ることがわかったことから、国としてもなんらかの対策をたてねばならないほど、大きな社会問題の一つとなっている。

幼稚園や保育園は社会的に大きく注目される以前からその歴史や地域性を生かして保育という営みを行ってきた。そこには子どもがいて保護者がいて保育者がいる。難しい問題を抱えながら保育しているところも少なくないだろう。

乳幼児教育はこれまで学校教育と異なり学習指導要領などの縛りが比較的弱く、国からの要請や管理から、ある意味では守られてきたところがある。それゆえ、国による縛りからは一定守られ、保育内容も個性的で特徴をもつ園が存在していた。しかし近年、幼稚園教育要領だけでなく保育所保育指針も告示になり、認定こども園という新しい制度も誕生し、保育はどこへ向かうのか、混沌としてみえる。それでも、平成30年度には幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に施行され、異なる3つの就学前教育の制度であっても保育内容の整合性などが行われ、広く公的なものとして教育という営みを位置付け、保育の質の向上が期待されている。

それらを踏まえて私たちは、「保育の専門性について—S県の保育の実態調査から」という研究課題で研究プロジェクトをたちあげ、「遊びを中心とした保育」を大事にし、子どもの様子からも丁寧な関わりが見られる園に5箇所、園長を中心とした管理職の方にインタ

ビュー調査を行った。本論文における「遊びを中心とした保育」とは、例えば「英語あそび」「体育あそび」等、大人が子どもにとって必要だと思っているものを子どもに一方的に提供する保育に対して、子どもの主体性を尊重しつつも、子どもの発達過程をみながら必要な援助（遊び）を行うような保育を目指していることを意味することとする。その意味では調査対象に偏りがあるのも確かであるが、ここでは一旦そうした園を対象として絞ることで、その園の保育を支えているものは何かを聞き取り、その結果から、「子どもの今と将来にとって何がよい保育なのか」を考えるヒントになればと思う。また本調査は予備調査的な位置付けで行っており、今回の調査で上がってきた論点について今後も調査設計を行い、本格的な調査を行う予定である。

1. 調査対象

以下、調査対象を一覧にした。

インタビュー調査は調査者が2から3名で園に伺い、園長職を中心にその園のリーダー的存在の方に、半構造化インタビューを行った。本調査は学内の研究倫理委員会の審査を受けており、調査対象者には調査の趣旨及び個人情報の保護、聞きとったデータは研究以外では扱わないことを説明し、納得の上同意書にサインをしてもらった。実際の調査は2時間程度で行いICレコーダーで録音し、後日文字起こししたものを一次資料として共同研究者で共有している。

調査対象園	規模	インタビュー被験者
S 幼稚園 沼津	100人 キリスト系 S4	園長（男性）
K 幼稚園 沼津	195人 S58	園長（女性）
S 保育園 裾野	S56年開設 150人	園長（男性） 事務長（男性） 主任（女性）
H 保育園 静岡市	90人 H21	園長（女性）
S 認定こども園 掛川	120人 平成6年開設	園長（男性）

それぞれの園の概要を簡単に紹介しよう。

S 幼稚園はキリスト教がベースにあり、私たちが伺った日は教会での誕生日会を行っていたが、賛美歌を歌い牧師が聖書の一節をよみ優しい言葉で意味をつたえていた。その間、子どもたちは落ち着いて座って話を聞いていた。インタビューの前に少し園の様子を見せていただいた。この日は保護者たちがカレーを作って賑やかななか、子どもたちも教会から保育室へ一旦もどったあと、個々に外にでてきた。運動会が終わった後ということでリレーをしている子どもがいたり、園庭の隅で土を掘っている姿が見られた。また園庭の真ん中では、かがみこみじっと何かをまっている女兒がいた。しばらくすると音楽が流れた。その音楽にあわせて女兒は待ってましたとばかりに踊り始めた。運動会で応援した様子がわかる。そしてそこへ「私もー」といつの間にか数人の遊びになっていた。

K 幼稚園は園舎の周りに広い園庭、そのさらに裏には茶畑があり、一部の茶畑のみを残し茶畑で囲むように広場がある。またその隣には大きな畑がある。朝の時間帯に園長先生に案内していただいたが、子どもたちは思い思いのところで遊び、必ず目の届く範囲に保育者が

さりげなくいた。広場には「子どもがいつの間にか持ってきちゃうのよ」という秘密基地ができており、でこぼこした広場を子どもたちはよく走っていた。畑にも子どもと保育者の姿があった。虫を捕まえたり、作物をじっと観察する姿が印象的だった。

そうこうするうちに10時になり部屋に子どもが入ってきたが、音楽もチャイムもなく、自然と子どもたちが自分のペースでもどってきている姿があった。

S 保育園は伺った日が雨で子どもの様子があまりみることができなかった。園長先生は父親から園を引き継ぎ、事務長が事務的な管理をし、主任が保育をみるといったチームワークがよい印象が話から伝わってきた。インタビュー後に施設を見せていただいた。給食の時間だったのでホールで子どもたちが美味しそうに食事をしていた。どの子も私たちに興味津々で「だれ?」「なににきたの?」と人懐っこく声をかけてくれた。子育て支援もやっており、別の建物には小さな赤ちゃんを抱えた母親で大盛況だった。

H 保育園は比較的歴史が浅い保育園といえる。この日はインタビューだけで時間がきてしまい園の様子を伺うことはできなかった。本論でも登場するがH 保育園の園長先生は公立の保育園を定年退職したあと、H 保育園を1から作った。あちこち土地を見に行ったり、人を集めたりしていたという。本当は自然の豊かなところがよかったけど、市がここでお願いしたいということで待機児童が多い地域で開設することになった。

S 認定こども園は木のぬくもりのあるあたたかい園舎になっていた。役所と交渉し、小規模園を同じ敷地に設置している。外には大きな山があり、子どもたちは道を駆け登ったり、山の上から垂れている綱を使ってよじ登ったりして遊んでいた。保育室には壁面は飾らず、自然のものを飾り、家にいるような感覚を大事にしているという。

私たちがみているときに、綱で上をめざしていた年少くらいの男児が、うまく登れずとまってしまった。私たち調査者が男児はこのあとどうするのかなあと見ていたが園長先生が助けにむかった。

以上、5つの園の大まかな様子を紹介した。どの方も自園の実践に自信をもっており、その自信を支えるものは園によって様々だった。以下に紹介するインタビューデータは、「今保育現場はどうなっているのか」をできるだけ現場の現実に即して広く理解したいというのが一番の目的である。本論では、先生方の語りから見えて来る「遊びを中心とした保育」とその外側にある保育や子どもをめぐる社会状況を浮かび上がらせたいと思う。次にそれぞれの園で抱えている課題について、その園固有の問題ではありつつ、普遍的な問題を問いかけられている事柄についても明らかにしていきたい。

最後に本調査から浮かび上がった論点を整理しまとめにかえたいと思う。

2. 「遊びを中心とした保育」を支える理念

私たちが「遊びを中心とした保育」をしていると捉えたインタビュー対象の園は雰囲気や保育の様子などそれぞれに特徴をもっていた。「遊びを中心とした保育」をしていそうだと思ったのは調査者であり、対象園のインタビューのなかでは言葉としてはあまりできてい

ない。ただ、それぞれの園が大事にしていることをひろっていくと、それは「子どもを尊重する」保育であり、そのことが「遊びを中心とした保育」を支える理念としてしっかりと存在し、語られていた。本論文ではそうした意味合いをこめて「遊びを中心とした保育」とひとまず捉えておこうと思う。そこで本節では各園が柱にしている保育の理念や思想を整理し、共通点を探っていこうと思う。

1) させる保育からの脱却

5つの園では結論からいうと子どもの主体性を尊重する保育をしようと意識していたのがわかる。それが顕著だったのはK幼稚園の園長先生の次のエピソードである。

「例えば、片付けの時に音楽をかけてしまう。音楽で子どもを動かしてしまう。それをやめたのですが、定着するまでに何年か時間がかかった。」

私たちが調査に伺った際には、チャイムもなく、音楽もなく、さりげなく先生が声をかけ、子どもも声をかけあいながら、それぞれが自分のペースで遊びを切り上げて室内に戻ってくる様子が見られた。遅い子どもも急ぐでもなく、急がされるわけでもなく、自分のペースで、廊下でもうひと遊びしながら、なんとなく保育室に入っていった。この様子からは「音楽で子どもを動かしてしまう」様子はほとんど感じられない。音楽などで受動的に体を動かされるのではなく、自分たちの意思で能動的に生活リズムがつくられていることがわかる。

H保育園の園長は公立園を退職したのち、新しく園を創設させた。新しい保育園で大事にしていることを聞くと次のような答えが帰ってきた。

「やっぱり自主性ですね。意欲がもてたらいいかなとか。最終的には人に対する優しさとか、ですね」

それを実現させるためにどんな保育をしているのかについては次のように答えている。

「0歳から2歳までは叱らない。叩かれたら痛かったねえとか、叩いたら痛いよねえというそういう保育。今保育士さんでも『なにやってんのー』って怒鳴る先生いますからねえ。そうすると『先生、そんな大きな声じゃなくていいよ』って。でもそういうひとはみんな辞めていきますけどね。」

「(3、4、5歳は)危険な時はね、やめなさいって言わないとダメな時はいうんですけど、そうじゃないときは、うーんおかしいなって子どものほうに投げかけたり、それから小さい子は大きな子にきてもらうとか。子どものいうことってすんなり受け取りやすくて、大人だと叱られちゃったみたいになるんですけども」

この話からは保育者が主導で問題を解決していくのではなく、保育者は子どもに考えさせる保育を意識していることがわかる。

また乳児には手作りおもちゃを作っており、

「1歳でいま手が動き出したなあとおもったら、そういうおもちゃを作っていく」

と話しており、子どもの発達を丁寧に看取り、それに適したおもちゃを手作りして子どもとともに遊ぶ姿勢が現れている。

S 認定こども園の園長は平成28年に認定こども園になるタイミングで園長になった。認定こども園になったこともあり、一斉保育から担当制に変えていったという。その当時のことを次のように話してくれた。

「今当たり前にあることが不思議に思わなくなってしまうことがある中で、特に0、1、2歳児の保育の中で一年も月齢差がある子どもたちが同じことをするなんてことは正直ありえないことで、その中でトイレ一つ取っても時間になったらみんなでトイレにいくとか、そういう方法もあって、同じタイミングで排尿があるなんてそんなことそんなことはないですし、また月齢差の中で同じタイミングでトイレに座らせてあげるということは、合っている子もいれば、まだまだそんなふうにはあっていない月齢の子もいて、もう画一的に一回トイレに座りましょうと、座れば多少出るわけで、そうすると保育者が『でたでた』といって、でも『おしっこ出るよ』というタイミングでしっかり出させてあげる子どもたちがいま求めているものがそのまま生活にイコールになるところを大事にしながら、子どもたちが主体的にとるところが本当に主体的にとはどういうことなのだろうと考えていくうちに、ああこれが主体性なのだなと気づいていった」

いままでは一斉に同じタイミングでトイレに行くことで排泄をトイレで行うという習慣が身につくということ「当たり前」に思っていたが、そうではないのだと気づいていった過程が語られている。給食も4、5歳の子どもは自分のタイミングでランチルームに入り、自分で食べたい量をとり、自分のタイミングで好きなものを食べているという。しかし「当たり前」を変えていくことは難しい。子どもはすんなり適応していくが、大人、保育者の側からは「今までやってきたことは間違えなのか」と反発があったという。保育が転換期にある今、重要な課題の一つであろう。

それでも、一つ一つ具体的に保育を見直す作業を続けていったという。

「みんながわかりやすい保育をしていけば子どもたちにとってもわかりやすい生活わかりやすい保育」になるように考え、今日この後何が起こるかわからない中で、どれだけわかりやすく部屋に入れば手を洗うのだとか、遊びをしていいのだとか、先生が給食のエプロンつけ始めたらもうじきご飯が始まるんだとか、あの子が食べているから次は自分の番だとか、ご飯を食べたら寝るんだとか、そういう毎日変わらない生活をしていくことが子どもにとっては見通しが持てる保育。それが保育者が一人一人に『今からコレやるよ』と言っていくと人が欲しいし、子どもたちも指示を欲しくなるし、子どもが動くことができる日課をつくってあげることができれば声をかける必要もない。少し声をかけてあげれば、遊びもきりをつけることができる。区切りをつけようとして遊びも進めていくし、それが1歳の子でも0歳の子でもできていく中で、職員数がそれほどいらなくなってくる。いい意味での相

乗効果ができたかなと。」

当初、担当制にしたときには、保育者は何をしたいか戸惑い、かえって人手が多くなってしまっていたが、子どもにとって見通しのもちやすい日課を作っていくことで、子どもの主体性を尊重した園生活が作り出されていることがわかる。

ここで重要なのは保育者にとっても子どもにとっても、両者にとって見通しがもちやすい生活をともに作ろうとしていることではないだろうか。

2) 伝統に貫かれた保育観

これまでに紹介した園は比較的新しかったり、新しいやり方に変えていこうと奮闘する様子がみてとれた。何かを変えていこうということは非常にエネルギーがいることであり、いろんな葛藤があったこともインタビューでは語られていた。そのことについてはまたあとで論じていこうと思う。ここでは、新しくしようとするエネルギーが「子どもの主体性」「子どもの自主性」であることが共通していたことに注目したい。また大人の枠に子どもを合わせさせるのではなく、子どもの姿からおもちゃを用意したり、日課を組み替えたりしていた点も共通してみられる。

次の2園は歴史が古く、その園の伝統が守られているという意味では、これまでに紹介した園とは対象的といえるかもしれない。

もっとも古い歴史を持つのがキリスト教の理念のもとで保育を行っているS幼稚園である。先にも紹介したように子どもは遊びたい意欲を持っており、その意欲に保育者が応えて関わっている様子があった。何を大事に保育しているのかについて園長は次のように話してくれた。

『『徹底して遊びなさい』です。『靴を履きなさい』とは言わない、『手を洗いなさい』とは言わない。そこは先生たちには共通している。そこまで時間をかけて遊びを保障するということですね。環境も恵まれた環境、心理学でよく使う自分でやったことをご褒美、シールなんです。教会の周りをまわって、それをチェックして運動会につなげたり。遊んでいる姿が、安心して遊んでいる子どもの姿がある。裸足になっていいと聞くのではなく、もう裸足になっている。人に対しても、先生に対してもそのまま警戒した感じがなく、遊びに素直になる感じ。積み重ねてきたものも、みんながそうしている。園児でないお子さんも一緒に遊んでいる子どももいるのも、園庭解放ですか。近隣の方も安心して活用している。』

園長は以前は私立高校の教員をしており、S幼稚園の園長は5年になる。人が育つ場において大事にしていることは何かと尋ねると次のような答えがかえってきた。

「子どもにとって、自分が大事にされていること。それが基礎を形作ることになる。それが大人になって自己肯定感を作っていく。『自分だけではないよ。一人ではないよ。』そういうことが保育の教育の根本ではないかと。そういうことは保護者にも伝えている。」

S 保育園の園長は親の後をついで園長職をしている。保育で大事にしていることとして保

護者にも伝えていることは、家庭が大事であり家庭の延長に保育園の生活があるので、両輪になって子どもをささえようということだと話してくれた。1日の保育の流れも次のように比較的良好に見られる保育を行っている。

「午前中には一斉保育を行っているが、保育者に任せているところが大きく、自由に遊びに没頭するような日ももちろんある。午後は午睡がないクラスもあるので、自由な遊びをやっている。百人一首やオセロなどにも、子どもが興味のあるものに自由に活動している。はじめに保育者がやってみてから、やりたい子から徐々に広がっている。机上の学びではなく、遊びの中から友だちの関わりが出てきたりして。行事も多いので、それを目標にして子どもの遊びも変化している。今であれば運動会が終わり、老人会がもうすぐあって、そこで竹馬づくりがあるので、そこからやりたい子どもがどんどん竹馬を作って練習を始める。発表会でそうした竹馬を発表したりもしている。」

竹馬が苦手な子にもその子にあった高さにしてあげるなど環境を整えると子どもは意欲をもって取り組むという。そして普段の保育を振り返ると「傍観」しているような子どもは少なく、「何もしていない子どもがいないね」と保育者同士で話題になっていたところだという。

「はじめに保育者がやってみてから、やりたい子から徐々に広がっていく」というように、保育者の指示ではなく、保育者が人的環境となり、やることを強制せず、やりたい気持ち、やりたくない気持ち、いろいろなその時々の子どもの気持ちを丁寧に尊重していることがわかる。

S幼稚園もS保育園も伝統と保護者との関係が園を大きく支えている。S幼稚園はインタビューの日はお誕生日会で保護者の方がきてカレーをつくっていた。保護者に積極的に園の行事に参加を促すことで保護者をうまく巻き込んでいる。また、少し発達の遅れのある子どもについてもできるだけ受け入れる方針で、入園時に保護者から子どもについて話してもらい、保護者同士の理解を作り工夫をしている。S保育園は地域の人と保護者の人そして卒園児を園の行事に参加してもらうなど工夫をしている。卒園児は小学校3年生まで夏祭りの招待状が届く。そして保育園のときにできた保護者同士のつながりは小学校に上がってからも続き、それが地域としての支えに成長しているようだった。

今回の調査対象園は「英語」「体育遊び」「鼓笛」などは「やりません」とはっきりと話していた。保護者からの要望があっても「うちはやりません」と説明しているという。それだけ「遊び」のなかで子どもが豊かに育っていくことに対する自信が見て取れる。S保育園では、この10年くらいで理解が得ることができ、保護者はむしろ「英語」などは後からでもできるので「遊びを中心とした保育」をしているS保育園を選び、親自身も楽しんでいく姿がみられるという。保護者も自然の中で、自由な時間を奪われがちな現代社会のなかで遊ぶこと、子どもと遊ぶことや保育園の行事に参加することで奪われた時間を取り戻しているのかもしれない。

以上みてきたように「遊びを中心とした保育」は「子どもの主体性や自主性の尊重」という理念に支えられて実現されていた。それは保育者の指示を最低限にしながら保育を作っていく試みでもある。それはある意味、理想的な人の育ちを支える理念である。一方で、非常

に困難な試みでもある。特に日本は大きな集団で保育を行っており、保育者の指示のもと子どもが活動を行う一斉保育が主流だった。浜口（2006）によれば、平成元年の幼稚園教育要領の改訂で「子どもの自発性を重視する保育への転回」があったという。この「子ども中心主義」とも呼べる改訂は保育者の指導性をめぐって、現場に混乱を招いたとも言われ、現在でも新しい実践様式や価値観の再構築が進んでいるという。それ以前の幼稚園教育要領では、幼児の経験・活動を「配列」するものとされており、平成元年のそれは保育者の意図的な指導性が強いと述べる。そうしたなか保育者が意図的に計画をたて、かなり保育者主導で保育を行っていたことがうかがえる。そうした保育をインタビューでは「一斉保育」という言葉で語られていた。この一斉保育スタイルは、大きな集団が安全に楽しく遊ぶための保育者の知恵でもある。しかし社会の変化のなかでそうしたスタイルの保育が難しくなっているなかで、保育を変えようとしている人たちが日本には多く存在する。今回の調査ではS認定こども園、H保育園、K幼稚園がそうであった。変えていくことは先にも述べたように非常にエネルギーもいる。根気もいる。保育者同士の共通理解も重要になってくる。そこで次の節では、変革にあたって、どのような葛藤があったのかをインタビューデータから明らかにしていきたい。

3. 異なる保育観のなかで同僚性をいかに形成するか

1) 教職員の共通認識を作る

これまでみてきたように「遊びを中心とした保育」を支えるなんらかの理念がしっかりと存在していることがわかった。それではその理念を教職員全体でどのように共有しているのだろうか。S幼稚園の園長は「保育ではチームワークが大切であり（中略）教師同士の話し合いや打ち合わせは普段からやっている」と述べ、職員室も笑顔で賑やかな場になるように気を配っているという。「保育はチームワークが重要」というのはどこの園でも共通しており、保育観の異なる保育者と一緒のクラスを担当すると、その違いのすり合わせに疲弊し若い保育者が辞めていくケースも少なくない。そこでこの節では歴史があり、比較的教職員の共通意識が図られていたS幼稚園とS保育園のインタビューデータをみていくことにしたい。

対象園の中ではもっとも歴史の長いS幼稚園の保育姿勢は「自然と身についていくもの」といい、次のような話をしてくれた。

「変な言い方をすると『焼き鳥屋さんのタレ』みたいなもので、はじめは作ってありますが少しずつ継ぎ足していくと、その人の味が出てくるじゃないですか。変なたとえですけど、ももとの味の中に新しい味を足していく。若い教師が経験のある教師の中に馴染んでいく。もちろん職員会議も行って異論するところは議論している」

その人の持っているものをあまり変えていくのではなく、慣れていってほしいという思いをもっており、職員配置も「若い先生にはベテランの先生がつくような感じ」でクラス担任をしているという。若い保育者の持っている持ち味を生かしながらも共通の土台のもとで同僚性を作っている様子がよくわかる。

同僚性を形成するときに、保育の理念や柱は重要であることも次の話から明らかである。

「園で培ってきたもの、それを次世代に伝えていく方法を、別にマニュアルがあるわけではないですから、幼稚園教育にブレができてしまう可能性があると思う。社会の流れに押されてしまうと、なぜこの幼稚園では漢字や英語を教えないのですか、鼓笛はなぜ早くから教えないのですかと言われる。幼児期には、遊びを中心とした生活という大原則があるのに、声としてニーズとして出てくるのですが、園ではやっていませんとはっきり申し上げているのです。いい小学校に行き、いい中学校に行き、いい高校に行き、いい大学に行くという時代は終わったと思うのです。こういう時代になってきて、もっと内面的な育ちをみていくことが大事で、迎合することはどうも。」

「(共通理解をするために)日本基督教団から出されているカリキュラムに従って、例えばその週案や日案を作りこんでいきます。この目標やねらいにのっとって進めていき、ですから突発的に数遊びをやりましょうとかやることはないし、入り込む隙がないわけです。」

遊びを中心とした生活をつくるという幼児期の教育の大原則と、日本基督教団からだされるカリキュラム案がベースになり、目の前の子どもの姿から週案や日案をつくっていく。そのなかで保育者は子どもや遊びについて議論を積み重ねながら同僚性が作られていることがわかる。おそらく「当たり前のこと」を事あるごとに、職員会議や子どもと遊びながらの立ち話などでコミュニケーションをとり、確認をしているのではないだろうか。

S 保育園は「保育園は家庭の延長であり、家庭的なかかわりを大事にしている」とし、保護者会でも同様の話を必ずするという。しかし「家庭的」という言葉一つとっても保育者の間でイメージするものが必ずしも同じではない。「家庭的とは」と言葉で伝えることの難しいニュアンスや園が持っている文化をどう若い保育者に伝えていくかはS 保育園でも課題であろう。園長は次のように話してくれた。

「家庭的なということは、指導はなくても、まずは笑顔で挨拶するとか。それから月に一回園内研修も行って、自らを振り返りながら、『叱りすぎたんじゃない?』とか微調整しながら、行事を通してみんなで作っていきようとしている。」

S 幼稚園の園長同様に、「伝える」ためのマニュアルはない。S 保育園でも「指導」するのではなく、具体的な子どもの姿や子どもとの関わりを振り返りながら、共通認識をつくり、丁寧に自分たちの大事にしていることを確認している様子が見える。

また若い先生に対しては「働いている間に育ってくれるだろうと期待するものもある」と述べており、一緒に「楽しんで」保育を行う日常の積み重ねの中で、その人の持っている力が育ってくるという見通しをもちながら若い保育者と関わっていることもわかる。

両園は特に若い保育者をどう育てるか、若い保育者に自園の保育についてどのように伝えればよいか語られていた。そしてマニュアルがあるわけではなく、日常の保育や職員会議のなかで、丁寧に言葉で確認していきながら、若い保育者がゆっくり育ってくるのを待つゆとりをもっていた。

2) 保育を変えるときに伴う葛藤

上記の園以外の3つの対象園は、園長が「従来の保育」¹⁾を変えようと奮闘する様子が見える。

インタビューデータから浮かび上がった。この節では、「従来の保育」に対しどのような保育へ変えていこうとしているのか、また変えるときの保育観がどのように形成されていったのか、さらに変化に対して保育者集団はどのように形成されていったのかをみていくことにする。

まずは公立園を定年退職後に自分の理想とする保育園をつくったH保育園のインタビューデータをみていく。

インタビュー時点で、H保育園は開園から9年目を迎えていた。なぜ新しい保育園を作ろうとしたか、次のように話してくれた。

「理由はないんです。私は仕事をやめたら何をやるんだろうなと思ったら、ぞっとしてきて、それで女性の起業セミナーとかいろいろ行っていたんですよ。託児サービスはどうかとかおもって、東京や名古屋へ行って（みてきました）。給食なんて全然手づくりじゃなかったりして。狭いところに子ども達が。何が楽しいのかとおもってなんか悲しくなっちゃったりして。（中略）（いろいろやりたいことなかで）保育園を募集しているよっていう話があって。自分は自然の豊かなところがよかったんだけど、役所がそんなところじゃ人が集まらないから、ここの地区にとにかく作ってほしいって。」

こう話す園長は、もともとは栄養士を目指して資格を取得したものの、親戚に保育がいいのではないかといわれて、一回は断ったものの、保育者の再募集があり保育の世界に入ったという。当時は保育専門学校の卒業生が保育者には多く、自分は保育の勉強をきちんとしていなかったと思い、自主的に研修にでかけていき、また、勉強熱心な保育者のネットワークを作りながら自分の保育観を形成していった。先にも述べたように園長は「叱らない保育」を大事にしていたが、次の話からも園長の保育観がよく表れている。

「〇〇保育園って、割と子どもに熱い先生、自然がいっぱいで、みかんなんか落ちていて、子どもは捨わないんだけど私が拾って食べたいくらいっておもったりして。保育園自体も自然がいっぱいで、川があったり、地域の人も協力的で、草がいっぱいだとかりにきてくれるんですよ。」

「△△保育園で、一緒に自由保育やろうっていつてきてくれた人がいて、やろうってなって、楽しかったです」

自然のなかでのびのびと遊び、地域住民とも連携してみんなで育ち合う保育観や一斉保育が主流だった当時、自由保育をやろうと志をともにした保育者と自由保育を模索した時期があったことがわかる。

平成元年あたりを境に「遊びを中心とした保育」「子どもの自主性の尊重」「環境を通した保育」へ国も舵を切った頃だったという。その前の保育は、保育者が「今日はお絵描きしましょう」「今日は粘土で遊びましょう」と保育者がその日の活動を決めて、みんなが一斉に同じことに取り組む一斉保育が主流だった。そんななか公立保育園で自由保育を始めるとあちこちから見学者がきたが、一斉保育をしてきた保育者から厳しい批判をうけながら別の保育をと格闘してきた経験があったという。

そうした自身の経験のもとで新しい保育園を開設していくことになる。

保育者集団を形成していく仕掛けとしては、1年目で年長クラスは担当しないこと、幼児は4月から6月は3、4、5歳児を縦割りにして保育をしており、若い保育者はそのなかで保育を学んでいくという。中には保育のやり方に折り合いがつかずに辞めていく保育者もいるが、共通認識を作るために、本吉先生²⁾を定期的に講師として招き保育の振り返りをしている。ただ、パートの保育者にはそこまで求めることは難しいことが課題となっていた。

いま課題になっていることはあるかという質問に対し、とにかく「楽しかった」と答えてくれた。園長の保育のなかには常に「楽しさ」への追求があり、それを「面白がって」作っていく様子がインタビューから伺えた。

K 保育園の園長の保育観は「子どもの主体性」の尊重が軸にあった。音楽をかけて片付けを促すのではなく、子ども自身の気持ちの切り替えをゆったり待ちながら次の活動へつなげていくという改革によく表れている。はじめに就職した園について次のように話してくれた。

「はじめに就職した園（保育園）は創立して2年目の園で、4人しか卒園児がいなくて、新しい園だった。園長は漢字教育がいいとなると保育に入れて、子どもはやればできるだけから漢字教育はできることはわかった。やればできるが、自由というか放任ではないが園全体を作り上げていたのですが、一斉保育ではあったのですが自由の保育の要素を入れてやっていたので、とても叩かれたのです。（中略）そのあと結婚して、勉強したかったからもう一度大学に入り、幼稚園だったら夏休みもあるので園を変えたら、その園がしっかり一斉保育だったのでびっくりして。じゃあ自分だけでできる保育をと考えて、自分を崩さなければと思い、自分だけは研修にいったり。」「でも時代も変わってきたチャンスだと思って」

H 保育園の園長と同様に「一斉保育」に対して「自由保育」を模索した経験が今の保育観に強く影響していることが見て取れる。その後今の園の園長になり、経営のことも自分で学び、保育者同士の共通認識を作りながら保育を変えていく努力を続けている。特に今年は公開保育の機会があり、外部の先生にも入ってもらい保育を見直す機会があったという。その成果を以下のように話している。

「子どもを大事にして子どもを信じていくという雰囲気はこれまでもあったのですが、それまで『こうしたいあほしい』という担任の思いでいく部分も見えたのです。（中略）その日は雨天だったので室内遊びをしているところだったのですが、長く遊びを継続していきたいという思いもあったので、『先生がこれ作るからこれで終わりよ』ではなく、子どもたちの思いも入れてというのが一つの課題だった。そこが少しクリアできたことが、先生たちにとっても少し自信もついた。（中略）もともとは学校評価のためだったが、その評価だけではなく教員の協同性を高めたいということもあったので、自分たちも思っているもなかなか言えない部分もあったが、園長の気持ちもわからない、言ったらいけないのではないかという遠慮があったみたい。私も『そうではないよ』と言ってもなかなかそこがうまくいかなかったのが少し柔らかくなって。」「これまでの行事でも、やらされているというところもあったけど、子どもと一緒に作り上げていくことができ、子どもの意見も取り入れながら進めていくこともわかっていたけれども、することが怖いというか、そこがなくなって、またよく

なって安心して見ていられる部分になったというか。まだまだなのですが」

保育者にとって「子どもの主体性を尊重する」ということが大事だと頭でわかっているけど、どこまで子どもを信じていいのかという迷いや、まかせてしまうことへの「恐怖」など、非常に繊細な葛藤を秘めながら実践を行っている様子がよく表れている。また保育者同士の協同性を作ることも大事であるが、いざとなると園長への遠慮などがあり、そこを超えて子どものこと、保育のことを議論できる協同性を形成するまでの苦勞も見取れる。それでも公開保育を通して、見直さなくてはとおもいつつ、曖昧さを抱えた保育を言語化し可視化しながら保育を振り返ることが、保育者の協同性を形成し、保育者自身の自信にも繋がっていることがわかる。

保育を変えていく過程で一クラス二人担任制にしていったという。二人のチームワークが厳しく問われる側面はあるものの、若い保育者が先輩保育者に助けをもらいながら学ぶ仕掛けをつくっていることも保育者の協同性の形成にとって、重要なポイントとなっていると思われる。

S 認定こども園は平成28年に保育園から認定こども園になり、園長は2年間保育園で、2年間認こども園に勤めて今に至る。もともとは福祉系の専門学校卒業後に県外の児童養護施設に勤め、その後児童館や学童保育などを経て、保育園、認定こども園の園長になっている。先にも述べたように認定こども園に移行するのを機に担当制に変え、保育者にも子どもにもわかりやすい日課を作っていた。その背景には「子どもの主体性の尊重」の徹底であった。保育について次のように述べている。

「一斉保育であれば、計画を立て、計画に子どもを引き寄せたものだったが、担当制に変えたことで月案・週案を各クラスのテーマをもってやっている。例えば『冬を感じる』といったテーマなど。」

「担当制と一斉保育の違いは『教えること』と『子どもを信じて育つ力を尊重していくこと』の違いである」

こうした保育観に対し、「一斉保育の中で、こういうことを教えてあげるとどんどんできるようになるのではないかと、教え込みの中で子どもたちが伸びていける部分はたくさんあるのではないかと。そういう意見の相違はある」保育者もいたという。ここには決定的な保育観の違いがあり、その違いを埋める努力はするものの、辞めていく保育者もいるという。一斉保育で子どもが伸びていることを実感し、その経験が身体化されている保育者にとって、この保育観の違いに対し、自分のこれまでやってきたことを一旦否定し、新しい保育観を自ら作り直していく作業は非常に難しいことがわかる。この問題は保育者にとっては保育観の再形成をどうしていくかという課題であるが、一方で保護者及び社会にとっては教育的価値の争奪戦でもあり、幼児教育が社会的に注目される今日にあって非常にせめぎあっているセンシティブな課題ともいえよう。

保育者集団の形成の工夫としては若い保育者には、リーダーとなる保育者が指導し、エピソード記述なども合わせて主任・園長が手をいれたり、面談や保育をみることで育てているという。また「働きやすい環境」を作るために、園長に直接話しができる環境をつくるよう

かなり配慮したという。これまでみてきた園同様に若い保育者を孤立させない工夫と、園長と保育者の縦の関係をいかに風通し良くするかが、保育者集団の形成のポイントとなっていることがわかる。

4. 園の抱える課題

1) 「遊びを中心とした保育」の「見える化」についての課題

S認定こども園の園長は園の抱える課題について、「だいふ保育が定着」しているものの「まだ『見える化』が足りていない。職員が入れ替わった時に同じようにできるのか、質の向上のための体系化していくことが難しい。保護者に園の良さをどう伝えていかも課題」と述べている。

「一斉保育」は「見えやすい」保育といえるかもしれない。保育者が指示したことを子どもが取り組むため、ゴールが見えやすい。しかし「遊びを中心とした保育」及び「子どもの主体性の尊重」は放任保育に陥りやすかったり、陥っていても実際の「効果」が見えづらいという特徴を持つ。近年、そこへの対応としては「保育評価」をどのように行っていくかや、ドキュメンテーションなど子どもの活動や育ちが見えやすい取り組みが模索され、手法も次々と開発されている。これまでも述べてきたように、保護者にとっては「英語」「鼓笛」などの活動は成果が見えやすく、子どもの成長を実感できる傾向も近年見られる。今回インタビューをした園ではそうした保護者のニーズの傾向に対して対抗軸となる保育を行っており、だからこそ、そこで子どもに何が育っているのか、子どもにとってどのような体験として残っているのかを、いかに可視化するかは保育全体の課題といえよう。

同様の課題はK幼稚園の園長も特に保護者との関係で次のように述べている。

「子どもの気持ちを聞き取っているつもりで、子どもの思いをしっかりと表現できていると思ってたのだけれども、母親たちの評価でそれが『あまりない』と出るので、伝わってないのわかって。では、そこをどのように伝えていこうかということになった。保育参観で伝えるけれども、日常のところを見てもらいたいと思っても、保護者にとってはわかってくださってなかったんで、そこをどう変えていくかと考えて、それならば1日解放するので、子どもの姿で気になっている場面を見られるようにした。」

「個人面談をすると、個人的なお母さんたちの話ばかりで個人面談で話したこともしっかりと伝わっていないことや何が育っているのかとか、わからないのですよね。その伝え方がいけないのではないかと考えて、写真でもうまくいかない。『こんな遊びをしていますよ』とか『うちの子が写っていない』とか。」

この保護者に「伝わらない」もどかしさは、おそらく幼稚園の保育観と保護者のそれが異なっていることが背景にあるのではないだろうか。今の保護者は子どもの教育に対して非常にある意味熱心である。例えば2歳の子どもに方程式を勉強させる親も実際にいる(加藤, 2010)。それは学校での成功が子どもの幸せであるという教育的価値観を強く抱いており、かつそうした競争に幼児期から親子共々巻き込まれているという現状がある。しかし幼児期において重要なのは学校の勉強に象徴される認知能力ではなく、非認知能力が社会にでてからの成功に寄与している可能性が高いことが示唆され、今回の指針及び要領の改定でも非認

知能力が 21 世紀に求められる学力であるとしている（汐見，2017 など）。非認知能力は遊びの中でこそ育つという位置付けがされ、遊びの重要性が明確化されているものの、保護者にとってはまだ理解が及んでいないのかもしれない。その意味では K 幼稚園だけの課題ではなく、保育全体の今日的な重要な課題である。

しかし希望はある。S 保育園や S 幼稚園では「遊びを中心とした保育」を保護者が選んで入園してくる。両園ともに方法は異なるものの保護者をうまく保育に巻き込みながらよい関係ができていく。どのように言語化し可視化し伝えていくかと同時に保護者をうまく保育に巻き込み、保護者も参加するような方法で遊びの中で子どもは何を体験しているのかを保護者自身も体験し感じてもらうという「見せ方」も重要なのではないだろうか。

2) 自由保育における計画の位置付け

S 認定こども園の園長が述べていたが一斉保育は保育者の計画に子どもを合わせさせるところがあり、その「計画」は保育者の緻密な段取りと工夫が練られているといえる。それに対し自由保育や S 認定こども園の「テーマ」による計画は、計画はあるけど子どもの主体性を尊重するために計画通りにはいかないというある種の矛盾を孕む。

H 保育園の園長は「計画はあるんですけど、その通りにいくばかりじゃなくて」とその難しさを語っている。そして課題としては「計画が中だるみになること」を上げており、保育者の計画と子どもの主体性の尊重との兼ね合いについてまだ課題があることを述べていた。ピアジェの理論や幼稚園教育要領などを参照して計画をたてても、目の前の子どもの、その時々々の姿で、保育者の関わりを瞬時に判断し変えていくことの難しさが課題として表れているともいえる。その課題を意識しながら、園長自身の経験と研修の成果として、園としてのおおよその年間計画及び月間計画を立てたところだという。次はそれを保育者と共通理解を図り、かつ保育者自身が自分なりの色をつけて、あるいは目の前の子どもの姿からアレンジをして計画を位置付けていく試みを行っていくのではないかと期待される。

その意味では S 幼稚園はキリスト教信仰という大前提があり、日本基督教団から出されているカリキュラムという指針をもとにしながら自園の計画を作っており、その大前提は計画を立てるときの理念なり思想ともいえる。そうした大きな理念や思想を作り、そこを柱にして日々の、個々の計画を作っていく力がこれからの保育者には求められており、より緻密に個々の子どもの「今」の表れから計画を生み出していくという高度な専門性をもとめられているのである。

6. まとめにかえて

5 か園の園長へのインタビューデータからは今日的な保育の課題がよく表れていた。ここでは今後議論すべき論点を整理することでまとめに変えたいと思う。

平成 30 年に新指針・新要領が施行されたが、一つのテーマとして幼保小のスムーズな移行が意識された改定になっていることがあげられる。「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」（「10の姿」）が共通に掲げられ、子どもの表れを言語化する視点が示された。それにより今回のインタビュー調査のなかでも課題としてあげられていた「見える化」や保護者へ遊びの中の育ちを伝えていくことへの一つの手段として示されたと言える。小学校へのスムーズな移行は重要なテーマでありつつも、そこには「小学校の準備機関として教育」対「遊

びと中心とした保育」という教育的価値の社会的なせめぎあいが存在している。そのせめぎあいは保護者の園を選ぶときの基準として表れ、幼児獲得のための園の経営戦略としても非常に悩ましい問題でもあろう。そうした今日にあって、今回の調査対象園は「遊びを中心とした保育」を柱に、保育の質の向上の努力や工夫を行っていた。

一つは「遊びを中心とした保育」においてどこまで「子どもの主体性を尊重するか」というせめぎ合いが実践の中にみられた。子どもをどのような存在として捉えるのか、子どもの権利をどのように実現していくのか、そこに対して保育者の保育要求³⁾をどのように子どもにぶつけていくかなど実践的にも研究的にも重要な課題が浮かび上がった。

二つには、「遊びを中心とした保育」を柱にしつつ、どのように保育者集団を形成していくのかという課題がうかびあがった。調査対象園においては園長や主任のリーダーシップの表れがみられるケースや、いくら工夫しても保育観の違いという極めて価値的な差異を乗り越え共通の土台を作っていくことの難しさも浮かび上がった。しかし保育者の離職率の高さがクローズアップされる今日、保育者集団をどのように風通しのよいものにしていくのかは重要なテーマであり、管理職と保育者の関係をどのように有機的にしていくかというテーマについてもいくつかヒントがみられた。

三つには保護者との連携である。保護者にとっても我が子にとってどのような保育が将来にとって大切なのかは重要な関心事である。先にも述べたように2歳児に方程式を解かせる保護者に象徴的な教育的価値における成功およびその競争に巻き込まれている保護者も少なくない。そうした保護者は「小学校の準備機関としての教育」に価値を見出し、そうした保育に熱心な園を選ぶだろう⁴⁾。その一方で「遊び」や「自然体験」など家庭ではなかなか提供できない体験に価値を見出し、「遊びを中心とした保育」を選ぶ保護者も存在する。S保育園とS幼稚園は「親が選んでくれている」という感覚をしっかりとち、保護者とうまく連携しながら子どもの育ちを支える関係がうまれていた。しかし多くの園がK幼稚園のように「保護者のニーズ」と「保育理念」とのズレに悩み葛藤しているのではないだろうか。その意味では、教育的価値の争奪戦の最前線に園は立たされているともいえる。

最後に、調査対象園に共通していえるのは目の前の子どもの姿や表れを大事にし、子どもが過ごしやすいように園の仕組みを変えていこうと日々努力する姿であった。園として大きく大事にしている理念や思想をしっかりと持ちながらも、目の前の子どもの「必要性」に応じてクラスを縦割りにしたり、クラス担任を二人にしたり、担当制にしたりと仕組みをかえていた。その絶え間ない研鑽は保育者の専門性において重要な要素であり、また子どもと共に生活と創るという保育の醍醐味ともいえるだろう。その日々の実践を実践研究として保育者と研究者が共同してまとめていき、子どもにとって今なにかが大事なのかを社会に発信し、子どもの今と将来にとってどのような教育的価値を作っていくのかが問われているのではないだろうか。

なお、本調査は常葉大学短期大学部の研究奨励制度研究助成を得て行ったものである。

(注)

- 1) ここでの「従来の保育」というのは個々の園の「従来」である。ある園は「一斉保育」を、ある園ではクラス担任制を指している。
- 2) 本吉先生の保育の事例は例えば本吉圓子ほか『生きる力の基礎を育む保育の実践』萌文書林などがある。
- 3) 加藤繁美が保育とは保育者の持つ保育要求と子どものもつ発達要求の対話であると述べておりここではそれを参考にしている。
- 4) 母親が小学校で我が子がついていけるかどうかというプレッシャーのなかで子育てしている様子は深田（2018）などに詳しい。

(引用文献)

- 汐見稔幸（2017）さら、子どもたちの「未来」を離しませんか：2017 年告示新指針・要領からのメッセージ，小学館
- 加藤繁美（2010）子どもと歩けばおもしろい：対話と共感の幼児教育論，ひとなる書房
- 浜口順子（2014）平成期幼稚園教育要領と保育者の専門性，教育学研究第 81 巻第 4 号 p66-77
- 深田恵美（2018）小学校に入った時に困る！？，教育科学研究会編集，教育 2018 年 10 月号，かもがわ出版
- 本吉圓子ほか（2004）生きる力の基礎を育む保育の実践，萌文書林